

## 第10回古代アメリカ学会研究大会発表要旨

### 研究発表

#### 古典期マヤ文明の日常生活と社会経済組織－アグアテカ遺跡出土の石器分析を中心として－

青山和夫（茨城大学）

中米グアテマラ共和国のアグアテカ遺跡およびその周辺に住んだ支配層と被支配層の住居跡の発掘調査及び出土遺物の分析、特に発表者の専門である石器分析を中心に、古典期マヤ人の日常生活と社会経済組織に関する研究の成果について発表する。

2004-2005年のアグアテカ遺跡第2期調査団による調査では、都市周辺部に住んだ支配層と農民の両方の住居跡の発掘調査及び様々な出土遺物の分析を行った。本研究は、2003年までのアグアテカ遺跡第1期調査団による都市中心部に住んだ古典期マヤ人、とりわけ王や貴族の日常生活の研究をさらに発展させる共に、支配層と被支配層の家族構成、所持品や活動の違い、ジェンダー間の活動の違い、手工業生産、分業制、社会階層、黒曜石等の搬入品の流通組織を都市全体において研究することによって、古典期マヤ文明の社会経済組織の復元にも大きく寄与することが期待される。

### 調査速報 1

#### ホンジュラス、ラ・エントラーダ地域における発掘調査概報

寺崎秀一郎（早稲田大学）

ホンジュラス西部、ラ・エントラーダ地域は、南東マヤ地域最大のセンターであるコンマ遺跡の北東約50Kmに位置する。かつて、考古学的空白地帯とされた同地域はラ・エントラーダ考古学プロジェクト第1フェーズにおいて、遺跡の分布調査がおこなわれ、現在では約700の先スペイン期遺跡が確認されている。ラ・エントラーダ考古学プロジェクト第2フェーズでは国立遺跡公園建設のため、フロリダ谷に位置するエル・ブエンテ遺跡の集中発掘、保存修復がおこなわれた。発表者はラ・エントラーダ考古学プロジェクト終了後も同地域において調査を継続してきたが、その目的は当該地域における地方センターの形成過程を明らかにすることであり、2003年からはエル・ブエンテ遺跡、エル・アブラ遺跡、ロス・イゴス遺跡での発掘調査を実施した。その結果、少なくともエル・ブエンテ、エル・アブラの両遺跡は、旧河川による居住の断絶の後、古典期中頃頃ほぼ同時期に建設が始まったことが明らかになってきた。コバン遺跡の周縁部における地方センターの成立と発展について、近年の調査成果を報告する。

#### チャルチュアバ遺跡タスマル地区調査

伊藤伸幸（名古屋大学）・柴田潮音・加藤慎也

チャルチュアバ遺跡は、エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマルなどの地区 に分かれている。2004年春までは、カサ・ブランカ地区において調査を行ってきた。2004年夏より、科学研究助成金を受け、ホンジュラスのロス・ナランホス遺跡とエル・サルバドルのチャルチュアバ遺跡タスマル地区の考古学調査を行っている。この 調査はメソアメリカに於ける古代都市の発展を明らかにすることを目的にしている。 タスマル地区においては、球戯場と大ピラミッドにおいて発掘を行った。大ピラミッド においては、測量調査の結果から内部に東西南北において各一基の基壇があることが推定できた。また、西側と北側には基壇の一部が観察できる。このため、仮説を検 証するために、東側部分で基壇の存在を確認する必要があり、発掘を行った。一方、球戯場では、実際に球戯場であるかは確認されていないために、建造物の発掘調査を

行った。

#### エクアドル・ソレダー遺跡の発掘調査（第3次）

大平秀一（東海大学）

2005年8月～9月、昨年に引き続き、エクアドル南部高地のソレダー遺跡の第3次発掘調査を実施した。同遺跡は、トメバンバ西方のアンデス山脈西斜面、標高約1800mの地点に位置するインカ国家の行政センターである。

発掘調査の対象とした地区は、バーニョ・デル・インカ東方に位置する丘のピーク付近ならびにその北東部に位置し、標高の高い地点に連続的に設けられたテラス群である。前者の発掘目的は、カバクチャの痕跡を確認することにあったが、検出に失敗した。ただしピークには、東方の山と関連する儀礼空間を構築していることが明らかとなった。一方、後者の発掘は、コルカ（倉庫）の検出を目的となされたものの、遺構は検出されず、建設途上にあると判断された。同テラス群では、マチャイ状の岩陰も発掘の対象とし、インカ時代における同施設をめぐる諸情報 が得られた。このほか、周辺域に3000基以上構築されている墓もこれまでと同様に調査対象として、はじめて完全な人骨を検出し、墓の意味ならびにムユンゴ領域における歴史を解釈する上で、極めて大きな成果が得られた。

#### 神殿と動物表象：リモンカルロ遺跡2005年度調査より

坂井正人（山形大学人文学部）

形成期神殿リモンカルロ遺跡は、ペルー北海岸のヘケテベケ川下流域に位置する。この遺跡の発掘調査を2005年8月15日～9月24日に実施した。過去4回の調査（2000,2001,2002,2003年）によって、リモンカルロ神殿の中央には広場があり、その周りに3つの基壇（中央基壇、南基壇、北基壇）がU字型に並んでいることが分かっている。これらの建築物はくりかえし改築されており、その改築のプロセスを細かく検討することによって、リモンカルロ神殿における建築活動の実態を把握することに努めた。その結果、南基壇と北基壇に、動物を表象する構造物が存在することが判明した。また中央基壇から3つの大穴が見つかった。今回の発表では、これらの基壇における発掘成果を紹介するとともに、2001年に出土した壁画（クモ、ジャガー、コンドルの複合図像）をはじめとする、過去4回の発掘データと比較検討する。

#### ペルー北部高地、コンゴーナ遺跡の石彫について

渡部森哉（日本学術振興会特別研究員）

ペルー北部ランバイエタ県の実岳地帯にコンゴーナという遺跡がある。標高約3000mの場所である。この遺跡でチャピン様式の図像が彫られた二本の丸彫りの石像彫刻が発見された。しかし徒歩で片道一日半かかる辺鄙なところにあるため、訪れる考古学者はおらず、その図像がどのようなものであるか不明であった。地元の学校の先生が一本の石彫の簡単な図面を起こしているが、はなはだ不正確である。発表者は2003年1月19日から21日に同遺跡の下見に行き、2005年2月9日から12日にかけて再び訪れ石彫の拓本を作成した。しかし石彫は傷んでおり、また雨期であったこともあり、拓本の完成度はあまり高くない。図面を完成させるためにはもう一度行く必要がある。本発表は遺跡と石彫に関する予備報告である。

#### ペルー北高地パコバンバ遺跡2005年度調査概要

関 雄二（国立民族学博物館）、ワルテル・トゥッソ・モラーレス（ペルー財団法人天野博物館）、

フアン・バプロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）、井口欣也（埼玉大

学）、

ラファエル・ベガ・センテノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコバンバ遺跡は、ペルー北部カハマルカ県、チョタ郡、ケロコト地区に位置する形成期の祭祀遺跡である。海拔約2500メートルにあり、高度的にはケチュア地帯にあたるが、アンデスの東斜面の気候の影響を受け、年間を通じて降雨や霧がみられ、植生は同県南部に比べて豊かといえる。ペルー人考古学者ラルコ・オイレが1939年にこの遺跡を訪れ、石彫などを発掘し、遺物を収集したことを皮切りに、1960年代後半からは、ペルー国立サン・マルコス大学が中心となって大規模な発掘が行われてきた。しかし、これまで詳細な発掘データは発表されておらず、巨大な遺構と確立された編年との相関関係も不明な点が多い。今夏、発表者が所属する国立民族学博物館と国立サン・マルコス大学は同遺跡の調査に関する協定を締結し、共同プロジェクトとして今後、遺跡および周辺の総合調査を開始することになった。本発表では、遺跡の特徴および本年度の調査の概要を提示する。

### ポスターセッション

#### 博物館におけるアンデス資料を利用した展示例の紹介（教育普及の取組み）～光記念館 特別展 インカ文明展を事例として～

吉井隆雄・竹内健二（光記念館）

南北8000 kmに渡って南アメリカ大陸を縦断するアンデス山脈。15世紀、この世界最長の山脈に出現したインカ帝国は、急激に国土を拡大し、16世紀初頭には、日本の約8倍もの領土を誇る大帝国となった。

その歴史は未だに神秘のベールに包まれたままだが、高地に住むインカの子孫は今なお、日常生活や儀礼など多くの面で過去の伝統を保持している。

光記念館では、2005年7月1日～12月11日まで特別展「インカ文明展」を開催中である。当館には中南米の資料が約450点、その内アンデスの資料が約250点あり、今回はプレ・インカ、インカ時代の資料を約150点展示している。

ペルー大使館、ボリビア大使館に格別な御協力を賜わり、また、東京大学名誉教授 大貫良夫先生監修のもと、クントゥール・ワシ遺跡より発掘した金製品のレプリカも合わせて展示している。

特に、一般の方にも理解して頂きやすくという事から教育普及にポイントを置き、わかりやすい展示、ハンズ・オン、ブットオン、体験学習の充実を図った。

これらの展示内容、教育普及活動の事例を大貫良夫先生の展示解説（映像）と合わせて紹介させていただきます。

### 調査速報 2

#### クントゥル・ワシ遺跡出土動物骨資料の調査概報

鶴澤和宏（東亜大 総合人間・文化学部）・関雄二（国立民族学博物館研究戦略センター）・加藤泰建・井口欣也（埼玉大教養学部）

坂井正人（山形大学文学部）・大貫良夫（財・リトルワールド）

ペルー北部の山岳地帯に位置するクントゥル・ワシ遺跡からは、精度の高い編年体系のもとで採取された大量の動物骨が出土している。報告者は、現地に保管された動物骨資料の分析に2001年より着手し、5シーズン目をむかえた今夏までに、約1万点の動物骨資料の同定・分析を完了した。本調査により、形成期中期から後期にかけて当遺跡で利用された動物種の構成が明らかになりつつあり、シカ狩猟からラクダ科飼育に向かう生業の時代変化が確認されている。本発表では、ラクダ科の利用に焦点を置き、これまで遺跡出土資料について本格的に応用されてこなかった、歯牙の萌出・咬耗段階を基礎とした年齢査定結果を報告する。現代のアンデス高地におけるラクダ牧畜では、最大寿命まで個体の飼養を続けることをひとつの特徴としているが、同様の傾向が当遺跡の形成期後期の資料でも確認された。今回の分析結果は、ラクダ科飼育の目的と方法が現代の牧畜と共通することを示唆する。

#### クントゥル・ワシ遺跡出土遺物の整理作業中間報告－石器、骨角貝器、土製品、金属器について－

荒田 恵（総合研究大学院大学）・西澤

弘恵（東京大学）

発表者は2003年度より、クントゥル・ワシ遺跡より出土した石器、骨角貝器、土製品、および金属器の整理作業を行ってきた。今年度までに、全点について計測が終了し、骨角貝器、土製品、金属器の器種分類および写真撮影はほぼ終了した。石器については、次年度引き続き整理作業を行う予定である。

この基礎データの収集と平行して遺物の観察を行った結果、新たに、いくつかのことが明らかになった。今回は、それらの結果について中間報告を行う。

骨角器については、器種分類を行った結果、織具と思われる遺物の出土量が多いことが明らかになった。また、遺物観察の結果、製作途中と思われる骨角器および貝製の玉製品を確認した。

以上のことから、クントゥル・ワシ遺跡で織物の製作および道具の製作が行われていたと推察される。大量の石製の磨り具および剥片の出土も、製品および道具の製作活動の結果であると考えられる。

#### 先史アンデス社会におけるソーグライトの利用と流通に関する調査研究

加藤泰建(埼玉大学)、清水正明（富山大学）、清水マリナ

発表要旨：ペルー北部山地の形成期神殿遺跡クントゥル・ワシから出土したソーグライト製品の理化学的分析の結果では、ソーグライトの原産地がボリビア、ラ・パス南東150kmのセロ・サポ山である可能性が示された（2004年度の調査速報で発表）。そこで本年9月に、現地セロ・サポのソーグライト鉱山での視察と資料収集および周辺地域における考古学調査等によって原産地であることの確認作業を行った。その成果について報告する。この調査研究は、紀元前1千年紀における特殊資源の流通がきわめて広範囲にわたっていたことを実証するものであり、形成期中・後期における社会発展を考える重要なデータを提示することになる。

#### ラス・ワカス遺跡および周辺沼遺跡2005年度発掘調査

鶴見英成（日本学術振興会特別研究員）

発表者は2003年よりペルー北部ヘケテベケ川中流域にて、神殿遺跡ラス・ワカスの発掘調査を中心として、先史アンデス文明形成期における社会動態を研究している。本発表においては、2005年7月から10月にかけて実施した、ラス・ワカス遺跡第3次発掘調査、およびその周辺に位置する形成期中の5発掘（“13.8”、チュンガル、ワコ・デ・ラヌ・レチュエーサス、カンタリーヤ、セロ・ヨナン）での発掘調査の成果について、その概要を報告する。

ラス・ワカス遺跡においては、2004年までに調査してきた神殿建築に加え、それに隣接して広がる居住域のデータを集めることができた。また周辺5遺跡について、それぞれの編年上の位置づけを明らかにした。

#### ペルー、ヤングヌーコ遺跡ならびにケウシュ（Queush）遺跡の調査

横山玲子・吉田晃章・須藤大輝・松本亮三（東海大学）

新大陸学術調査団は、2005年8月から9月にかけて、ペルー・アンカシュ県エンガイ地方において、昨年発掘調査を行って、ヤングヌーコならびにバタバタ遺跡の遺物整理を行うとともに、INC-アンカシュと協力して、ケウシュ遺跡の測量ならびに表面調査に従事した。本調査は、2006年～2007年度に予定している発掘の予備調査である。

本遺跡は、ヤングヌーコ遺跡近傍の海拔高度約3500mに位置し、約20基のチュルバ、150基に及ぶ地下式墳墓、および広大な建造物群よりなる複合遺跡である。表面最終を行った土器の中から、明瞭にチムーの特徴をもった土器が確認されており、ヤングヌーコ同様、北海岸とのつながりを示している。

本発表では、ホンコパンバ、ウィルカワイン遺跡等、方形のチュルバで知られる遺跡との比較を行いながら、本遺跡の性格に関する予備的考察について論じる。

#### ウルピカンチャ遺跡2005年度発掘調査報告

徳江佑和子・熊井茂行（明治学院大学）

ウルピカンチャ遺跡は、クスコ県キスピカンチス郡、ワカルバイ湖を見下ろす山の斜面に位置する。報告者は2005年8月から10月にかけて、この遺跡の発掘調査をおこなった。

同遺跡は、アンデネス、数段のテラスとその上の構造物、半円形の広場などから成る。遺跡中心部と考えられる部分を、約10x20mの範囲で発掘し、5つの部屋からなる一連の建築と、その周りに配置された回廊や基壇の構造が明らかになった。3つの部屋は、幅約1mのニッチを複数持ち、またすべての部屋の壁には白い土塗りがほとんどこされていた。ひとつの部屋からは、高さ約90cmのアリバロ型土器が2つ出土した。基壇のひとつは、自然石を囲む形で作られていた。出土した土器のほとんどはインカ期のものであり、実用土器は少なく、アリバロなどの儀礼用土器が大部分であった。これらのことから、同遺跡が儀礼的機能をもったインカ期の遺跡であることが明らかになった